



- 前号で「植物を育てる」という栽培活動における、子どもたちの発達段階に応じた「ねらいや目的」の違いについてご紹介しました。
- 今回は続きの話として、なぜ「植物を育てる」という教育活動が、こうも学校園でくり返しくり返し行われるのかをご紹介したいと思います。
- 結論から先に言えば、「植物を育てる」行為は「人が生きる」ことに深く深くかかわりがある行為だからです。
- 「植物を育てる」ことは、すなわち「成長を見守り、世話をすることそのものです。人の「思いやり、いたわりの心」を育みます。
- 「植物を育てる」ことは、すなわち「価値を生産することになります。またそれを「将来の生業（なりわい）」とする人も出てきます。キャリア教育といいますが「自分が今後、どう生きるのか」を考える、ひとつの適切な機会になります。
- 「植物を育てる」なかで、大きな収穫をあげることもあれば、上手く育てられないことも起こります。すなわち「(教育的な) 成功や失敗」という経験が得られます。またその経験をいかし「工夫や改善」にも取り組むこともできます。正に人の「向上心や創意工夫」を育むよい機会となります。
- また「植物を育てる」ことは、「地道にコツコツと取り組む」ことによって成立していく活動です。人の「努力やひたむきさ」を育ててくれます。
- さらに「植物を育てる」ことは、「自然」に向き合うという貴重な機会にもなります。人が「自然」によって生かされているという実感は、他者の言葉から教わることではなく、その人その人が「自然」と向き合ってこそ獲得できる感性だと思っています。
- つまり「植物を育てる」という活動は、「人を育てる」という教育活動との相性がとてもよいので、特に幼児期・少年期に盛んに取り入れられる活動だといえるのです。  
なお、中学進学と同時に学校のカリキュラムとしての栽培活動はピタッと終わってしまいます。私個人としては「もう少し、続けていったらよいのにな・・・」と思っているのですが。